



里見八犬傳
拾七編
卷四十五



3416
96



13
3416
96

拾七編 子書 之 月

子書

勝善院

南總里見八犬傳第九輯卷之四十五

東都 曲亭主人編次

第百七十五回

南弥六靈を顕して子を祐く
礼儀時を失ふて時小爲と有り

この日文明十五年。十二月八日の暁天申斐武田信昌の代軍をける。武田左京亮信隆の豫欲するよりあれは定正の衆艦と共に縦と解のらう胡意波上遙後れて那隊の從に浦河の澳に猫見と下る。情地順風と俟つ程天の稍明えと思時候戌のと波を起し。是は究竟と舵工們の下知して前面を鋸山の麓路投て漕ぎ正相摸る浦河より上總の鋸山の最近を。水行二里を過ぎ順風儘き便宜あるれば一瞬間に其衆艦の浦邊を果おけり。當下信隆の艦と棄磯を登りて隊の兵を皆從る。情地の山路をち入りて已が故の城地を廳南へ赴りて地方の

民も知らずけん。後ふゆえけり。話分兩頭。その日洲崎の陣中。荒磯南
弥六が身後の螟蛉見る。磯崎増松。其実父董野の阿弥七と椿村の隊六
と共侶の烽火臺の加役の充られて。件の吉室下。在りける。遙か眺目。洲崎の澳の
水戦。自家十二分の大勝利也。焼盡さる。寄隊千百の戦艦の燬を免る。この
稀中。猛火と做りて。波上。煽々。光景。冠成。筑石の海。不知火中。似
たぐ。敵の衆兵身を焦して。烟裏。叫ぶ。聲の焦熱。地獄の罪人の呵責もがく
て。あつげれと思へ。毛骨竦然。人比。駭く。中。増松の総角。れども。性とて
武勇。好む。自家の士卒の勝。不。乗。拵。を。呈。次。を。親。と。隊。八。八。叫。く。我。們
烽火の加役。とて。その。処。に。ゆ。れ。も。自家。既。戦。以。克。て。敵。又。寄。去。く。も。あ。ら。ざ。れ。ば。烽
火を。颺。く。急。を。報。る。と。あ。る。べ。く。も。あ。ら。ざ。り。か。そ。も。船。を。乗。り。出。し。て。焼。殘。り。る。敵。は
船を。流。さ。で。命。も。留。む。べ。く。且。水。不。溺。れ。て。命。を。殞。す。敵。の。亡。骸。と。命。揚。る。開。が

中。那。那。衆。隊。る。大。將。品。も。さ。ず。や。然。る。に。仁。慈。を。旨。と。あ。る。館。致。以。忠。信。也。
と。空。く。あ。て。這。臺。下。に。在。る。を。優。る。べ。い。の。議。を。思。ひ。あ。ら。ま。や。と。言。老。實。達。々
談。ぶ。と。阿。弥。七。急。に。推。禁。め。て。亦。要。る。を。拵。了。入。汝。の。尚。総。角。を。館。の。憐。し。思
食。て。あ。の。加。役。の。做。さ。れ。り。及。く。御。軍。令。の。違。ひ。る。後。の。御。咎。と。争。何。の。せ。え。用。さ。る
と。君。が。隊。八。の。亦。の。意。と。好。と。て。俱。不。の。字。と。の。の。從。ふ。べ。く。も。あ。ら。ざ。れ。ば。増。松。を
い。く。る。と。思。ふ。め。り。争。ひ。難。て。默。然。と。て。在。り。ける。程。敵。の。衆。艦。の。燬。盡。さ。れ。り。
閉。戦。克。つ。自家。の。勇士。の。敵。の。殘。兵。離。船。不。乗。り。て。命。を。涯。り。逃。去。る。と。猶。脱
さ。す。快。船。と。漕。走。り。せ。り。趕。ふ。程。洲。崎。の。澳。に。兵。隊。火。絶。て。敵。の。棄。棄。し。巨
艦。の。或。は。過。半。焦。る。も。或。は。舟。底。の。殘。る。も。あ。り。て。波。濤。の。揺。動。々。々。漂。ぶ。増。松
遙。か。眺。望。す。今。那。艦。と。命。も。あ。ら。ざ。り。孰。の。時。を。考。へ。ん。や。と。思。へ。心。焦。燥。て。連。り。の。嘆
息。あ。ら。折。々。天津。九。西。郎。員。明。の。戰。飯。餽。の。所。役。果。て。聊。暇。と。は。ら。さ。り。と。あ

この日の水戦を見まじ欲さ伴を俱せ至劍太刀身の身甲の針脛衣まで這
頭の浦邊より出まじ舊家老隸の老僕詰茂佳楯と相俱料をく小舟の
ける増松等三人との前日洲崎の陣營を義成主見参の折送面成認
まうあれが増松の歎ひてのまご口誼も果さる件の意衷を恁々と告て好夕を請
問へ九三四郎駭嘆して噫和郎の年尚十五ふ足らぬ里の総角をける忠
勤を思ひ起せし恐れく南弥六の靈甞をいさるあをあらんぢん我も亦尪弱多病
る主君の與館今番の従軍を許さぬを絶ふ是戰飯司の姪兒所を
あけると本意するとの思ひ今日日偶暇ありてや和郎と共侶那海上の焼
残りる敵の艦を合集て那亡散をも曳揚てん然ども這情願を先餘
請まらして御免許を稟るふあはげ軍令と破るふ似らるといひ後方とら
るる詰茂和老の昨日堀内使の従軍御陣小参り在ることを幸ひられ

情由の目今所れ如い増松と咱考が與堀内王ふあをを生口て館の御
免許を請ひぬねなよを死てと憑むとと余佳楯の異議も多そをあら
見館倘御許容るる小可走りて又來てん來むに障りると思ふて去向を死
あひと父急増松と阿弥七と隊八号の楫をま君が在陣所を投て
走のり小程天津九三四郎の烽火臺なる本番の頭人の増松が情願
と目今詰茂佳楯の館を請まらせざるふさへ箇様々々と告知せし這
臺下小維れる快船二艘と釘見栲索さへ多く求めて開が一船増松と
阿弥七とち乗せら又一船中隊八と九三四郎ち乗ら俱小艘を推船と
標りて漕出を皆是上総人なれば波の上自由ゆる暴風激波とめとせむ
又只這四個両船のさるる烽火臺の頭人の尚総角増松が忠勤を賞
感して俱他等と帮助んと別快船十艘小雜兵百十數名とち乗せて

増松九三四郎等不従いせし増松九三四郎等其の日の梓は便宜とて焼
 残りたる敵の巨艦の流るるを迂留め曳繰して這方の磯に維々者抄り又金
 見どりく海を撈りて兩敵の亡骸を索る自家の士卒の戦殺り稀ぞ敵の火
 焼れ水に溺れる屍骸の數多ふ盡るも有恁一程の扇谷の先鋒の小頭人
 水禽隼四郎緑林錦帆八四九郎近範の原是海賊の頭領るれ水戯至妙の
 本事ありとて敵の艦を燔れ時俱水の中火を逸れて波濤を被じも敢死
 るを既あり其艦の焼亡て流る板子と抱れ身を浮せて波濤のまゝ流れて在り
 焼残りたる艦も逢りてち乗れ逃れ去ると思ふのら亡目龜の浮木似てあり
 かく海廣く波異れれば便宜とてさし烽火臺より加勢の雑兵の船より
 是を見奉りて是も亦敵の自家の軍兵の浮屍骸あるべしとて多く見奉りて
 撥り多し船も載りて緑林と近範の俱あり便宜とて是も猶も死する面色
 あり

一雨其時氣力と頭多く共侶の衝と身を起し其威勢初に以て腰に残り大刀
 引抜き船も敵の雑兵を斫り又斫りて其の船も驚き余の雑
 兵も中る者も散動して瘡を負ふ者も多し當天津九三四郎の隊は
 只二人別船に乗る在り今この異変も驚き俱に船を漕ぎ去る件の船も
 乗程りておれ白徒卒介るせと喚禁めり刀を抜きて水禽隼四郎緑林
 と刃を交へて一上下と聲をうけ殺結ぶ程もあらぬ増松も亦是を見り吐
 嗟と云り親阿弥七と共侶九三四郎を援んとて船を這方へ漕りて未ぬ所を
 錦帆八四九郎近範の亦も是を見り増松が童年多し悔りて敢又物
 とも思ひ近づく隨ふ其船も舵を閃りと乗程ると阿弥七の乗せしとて械りて逆
 ふを近範の隻脚を飛り蹴りて又増松を載りて振り廻りて刀の電光を
 うわらぬ近範の目前に燦と起り陰燐の光り近範憶む眼を射られ苦と



六六天

寺松

増松勇と
奮ふと
敵を撃

八代傳九郎卷四十五

文楽堂藏



六六天

寺松

ゆき七

八代傳九郎卷四十五

文楽堂藏

叫びて兵兵く程の増松ゆると力と抜て敷るる鏡く近範が右の巻を所落
其近範徳ても猶弱らむ左の巻をの増松の組んと杖ひを遣反して鏡の透を
撲地と斫るも裏牙の窮所の深疾近範竟も堪難て殿居も挫と平張
俯くも脚を阿撥て死にけり。介程又一船も天津九西郎員明の水會年四
郎緑林と刃と交へて刀尖より火出るも戦へとも緑林素より猛者ふて武藝
剽姚凡庸るも員明危うけられ椿村の墜八も俱も刃と打振々々援けと連
了も挑と戦へとも緑林威力 杜中右の中り左に在る最も劇しく大刀風も員明も亦
墜八も身も負ふ痛疾も堪難る墜八も憶も腕乱れ在難ていしく危うけり
程も又只磯崎増松も今剛敵と敷を捕りかど蹴られて滾り親阿弥七を勦り
慰るも暇あらず又員明を援んとし。いそぎも船も漕もま不既中て員明の只受
大刀も做れるもの吐嗟目今敷果さるべく見えん。増松も心焦燥て間のいそぎも近か

らぬ水と隔る船より船へ入りと蜚入る自得の剽姚緑林是も墩馬望見くるを
丁と斫る斫られて緑林一霎時も堪難る刀と棄て仰るも挫と輾る員明の只受
と刀と合直して登り蒐りく刺んとするも増松も推禁めり。登り等も天津
主権且這奴と活し置む。其姓名と知るよりも定正王の存亡と誰を訊ね誰を問
憐るも要るるるばやと。員明有理と悟りて然るも結紐を登り隊共索の七俱も
も傳ひの巻もさくといをせ。隊共八も登りや。痛疾を忍び身を起して濱沼と
ゆる緑林をの巻も結紐の然るも阿弥七も近範も蹴られの巻も恙を
けんべ又艘と推り船と寄来て苦戦も勁敵降伏の勢ひを舒るも。這他加役の
雜兵們が乗るも船の間遙く遠くけられ。這闘戦を知るも。知ざりも。稍も知
アミウら墩馬望見聚ひま。且増松も拵の拔萃るり。稱賛も。介も。這増
松の本性武藝を好めども。素是莊客阿弥七が第二の子也。且寒家小生有月

たれが鞭子劍の技のまもりの学ざりけるふ約莫の日の棒たれ此の八郎朝録倉の源
 太平鞍馬の牛孺丸の伯仲を死に段あり開きと原ふ上の出像を見え
 たる如く初錦帆八四郎近範が這方の船に移り來て増松危ふり一時怪む
 べ。其義父荒磯南弥六が在り世の形貌変らむ身の内細鱗の杉甲の重鉞
 打る肱甲十王頭の脛盾して黒金表装の大刀と跨へ忽馬として影の如く立顯
 れた近範を渡り林めてを動せを身の内一箇の陰火と做りて増松が口中へ閃
 め死入るよと見る程増松奮勇日屬の似む武藝剛姚向ふ前ふる矢場も勤
 敵近範を斫て兩段に做せしむる又緑林の瘡を負せし輒く他を生拘りて且
 九三四郎と隊八を極ひゆる戦功の則是南弥六の霊の致す所を九三四郎隊
 八を益愛するも是を知む只阿弥七の近範蹴られて仆れり時々の奇異を
 認めよとの其言分明るるも増松の那時より眼光を聲耳音さへく南弥

六の首をとりて心術猛可く大人備はれ誰か非を疑ふは員明を首を墜
 八並に加役の難兵都ての奇談とぞ知る者亦るまを感嘆して那南弥六を義侠
 る死して後も靈亡びむ眞助の其子ありせし伏姫神の亞るべしと稱て美談
 たるける然亦幸ふ九三四郎も隊八も其瘡の窮所をねば疼痛甚しきを俱ふ
 汗衫の袖を裂きて其瘡口を巻るも却て却緑林と責てその兩個の姓名と定正
 存亡と問ける始に左右をいざりりとも深瘡の上る管の堪ねば則其身と
 近範の姓名出處又定正の憲儀后細等も援けられ小船に乗じて逃れ去
 りたるは又只そのものさし加役の船を引上る敵の屍骸を中の中扇
 谷の先鋒の頭人大茂林小彦濱川小渡等の餘も有名の士と云ふを謀も
 知るよりあるり亦ある時緑林を見せし稍是を知るもその時自家に
 諸軍兵も燬を免れ敵と討するもるけれは這頭も在るべしと云ふ獨軍師大

坂毛野が一隊の戦艦數十艘の洲崎の澳に猫見を下りて二重時士卒を
鶴へく有り相距ると二十町を過たされ九二四郎増松松門の美を軍師小告
んも則告口水會集四郎緑林並錦帆八四九郎近範大茂林小彦智
濱川小渡鏡久等の首級亡骸と船不載と漕舟其里に赴て言信々と
委曲を聲申して且生口緑林と近範等が首級と軍師の実檢入れ久瀧智
賞感大なるに恥て九二四郎増松阿弥七隆八等不對面其戦功を譽めて
且父を就中夢く如に増松が武勇拔群る是併其義父南弥を神霊の
致す所歎義士の俠氣死して亡びも実の感ざる餘あり我の徑に武藏へ渡り
敵の脚を止ませんと欲せ汝等ハ又蝨く洲崎の御陣へまゐり俱に功を奏し
る我も亦勝軍の美を告まらんとして隨即兩個の老兵不課せ進進状を
らまふ増松等が戦功の美事さの寫載ら悠而件の老兵等の増松等が

船不乗て俱洲崎の港口る望洋臺不赴く程生口緑林の深癘を堪は七
船の内ぞ死ふけり然に瀧智の頭人小森高宗千代九豊俊浦安友勝木
曾季元等のゆえ後件の奇談と听く者義成主を首と七太士四家老諸頭
人雜兵奴隸土民壯客婦女童蒙に至るまで感嘆せざるはるのり不題の
日の曉天大村大角礼儀の料らぞ新井の澳中三浦暴二郎義武の御留
せられて艦の前後と争ひ已まざ角口小時移り天の明ると暮る時候洲崎の澳
あり而敵の閉戦起りぬと争ひて猛火遙天外りく餘煙這方又驟驟にけり
以る哉初の勁風乾るり其風猛可吹来り既其不倣りこれより大角
これを瞻仰る原來閉戦那圖不當れ今中と益の口論の時を移さる期不
後れん兵每艦を疾遣らるると喚り刀を抜て敵の楫る艦の鈎索托地と研
拂へ堀内雜魚太郎貞住も勇る聲と震起り士卒と罵り促り敵の楫

たる釣索を所拂ひ又所断せ漕の去りも欲まれば義武愈怒る堪は
 噫鳥僻の白物每非如管領家の兵人も鳥合の野武未魁せしれ何ぞ
 のて面目せん兵毎先那百中と敵捕く強く水路を崩せと喚り哮る聲と
 共小競ふ新井の三頭人水崎番人甲良龜九小磯真砂五八舵工亦下知て
 一瞬間二十餘艘の戦艦を獨樂の像く漕統させ大角が十艘の船を遣
 る捕籠て敷んと找むと大角の敢又物とせ四下小响く武者聲高く義武
 听れ我鳥僻るらんや若們反く鳥僻技ま我豈赤岳百中らんや実も里見
 股肱の臣是八大才隨一人犬村大角礼儀我定正と謀りぬ你親義
 同小艦と借りての要あるも今朝も寄敵の背より火を放さむ欲せし
 中々你の抑留せられて那期も後れ腹腹今先若們を斬りて新井の城を
 攻捕てんがら其愚と知るるふ兎を脱て降らむとせせも果む義武も

且駭たもも怒りて原来里見の間謀見ふ欺れしを悔いけれ兵毎先其大
 角奴と捉へて又強く牽りて来よと脚踏鳴りて焦燥も既新井の隊の兵們の
 思ふにけるもの敵と里見も名高る犬士の一人犬村大角礼儀と名告ると聲と
 勢ひ折けく左右多く找まむ義武のゆく焦燥もみづから鎧とち振り
 うち振り近く敵と刺しつ水崎番人甲良龜九小磯真砂五八は是も氣を
 強く漕寄々々艦と連り不找れが惴雄の壮依本事ある老兵も各先を争
 ふまふ或敵の船も乗程り或又乗程られて連り不挑戦も礼儀と兵を
 用れ小勢中々反て撓む責任も亦衆小先とち奮戦突戦術を盡せし
 義武隊兵三倍して驍勇向ふ前るも勝と取る易くねばのぞ雌雄と分
 かる折々洲崎の澳る兵孫火の風のみ吹散されてあふ亦飛來るも既
 一團の敢火閃いて新井の船も柴薪の燈と降かる程もあは其船忽

地猛火と做りて防がぬ死士卒の吐嗟と有り散馬噪りて焼れて死すも
多し然ハ日來成を祝融の祟り又只是の事なり其火四下小飛程りて義
武の隊の船を燔く者五六艘及び久甲良龜九郎小磯真砂五郎水崎
蟹八士卒も俱不幸く他船に乗程りて遁れ去りて欲せし大村大角堀内貞
任艦を風上より相找りて士卒を駈て攻戦ふ大風烈しくければ敵の頭人
龜九郎蟹八真砂五士卒も各痛痺不堪難く首を並べ俯きあり
或は海へ飛入りて死活を知らざるも有り當下二浦暴二郎義武の火中も慌
び敵中も怯まざる少く士卒を罵獎して近づ敵を刺し聞戦ふ劇ありて
其鎗竟折れ火火光不就大角の乗る船を危と見くのでや組んと身を
跳るる飛入るる大角組せし身を反して其身を合々引投板
子の上投付其自家の士卒折累りて押そ索より引け義武槍ふる

あふ敵の残兵皆降参りて這里も聞戦果おけり登時大村大角の堀内貞
任も召集合々の我憶も這禍鬼の拘りて放火の時後まづ小
今も洲崎の澳に造るとも六日の昔蒲十日の菊也倒小要るるあべ
大坂が逆謀り八百八人の御仍れて自家十二分の勝軍をあらんが因て
又意ふ義同其子の我為小橋のりぬと噂知るが必怨小堪むして時を移さ
む推蒐未も今復多く欲去へし開を我切所埋伏して敷き破らんか
其隊配の箇様を言詳不叫れ示せば自任並老兵們も皆欣然と諾るて
俱小隊分と定るる二百個の隊の兵小降名の敵兵を相加へ通五百餘名
るり則是を三隊小分ち其一隊小自任を頭人とせ而大角を生口
義武等も猶船小存せし士卒五十名をり守りて其の他は皆艦を無
水際小登り立ち程小天の明け鳥鳴渡りて朝霜白く風寒る小程小新井の

城王三浦義同其子三郎義武が敗病後を敷きとる。今日水戦の先を
 見ると隊の軍兵をわき出て死をいふと思難く再宿せしむる時
 近習を慌しく枕方も多て告る。目今澳の方より猛火の光り雲を
 穿て中天に映ると告る者はいひて船火事と見ると程小御向小郎君も
 ひまより洲崎の戦場へ赴けり。頭人甲良龜九郎と其隊の雑兵二名
 俱小痛癢を負りて城門を敲らる。城門を敲らるるに火急の注進い
 も果さず横見反復岸破と起てて安らぬ取て先我所ん袴をのち
 いそぐ立身装束して大刀を佩る燭を兼ち近習を伴從へ。又
 廣椽小立坐其頭の雨戸を閉まれば召を遣しと甲良龜九郎從雑兵共
 侶小身尖刀瘡濡鐵の吊腿重げ庭門より走り入り地上坐され義同
 又聲を被りて甲良龜九郎より許る其身の刀瘡故をわらぬ

を。と向ひ答て然し御向小御向小郎君も
 らも実ハ里見の犬士とゆえ大村大角を以て然れ敷く借ひる柴薪
 寄隊の艦を焼盡さむ欲せし我郎君の抑留せられて合期せざれば怨
 堪む。みづら実の姓名と告りて聞戦ふ及小洲崎の方より兵隊の最も
 蜚散り來て我艦も焼く。是より自家利を失ひて敷る者甚し。且
 郎君の御武勇も御病後を以て甲斐を失ひて折れ勢窮りて竟に擒
 の。他小磯真砂五郎及水崎兼人戦殺せし生拘られ後開知ま
 惜る。取身の存命て阿容々々とわらふ。いふに義を報まんと思
 たり。いひてと勸解の息を吐き雑兵も喘を止めていふ。上小郎君も義
 同の怨も堪む。原赤出百中ハ里見の犬士とわらふ。鈍も那奴謀
 多士卒と喪ひのさす。我子と擒せられ武門の恥辱の上を遠く

去りて迂回し、血やう怨を雪ん疾陣衝して人馬を聚へよ。疾く近習を推立遣りて、其身の奥へ退いて時を程さむ。我衣して眉尖刀引提て、廣縁三つ出で、名程不素より武備不備し、家風不従ふ勇士、猛卒比自、轉と探甲を、又蝨く廣庭を、取合者甲乙百名許多べ。尚聚ぬも、其の、開を、中を、義同の馬を、身を、躬に、乗らる、後れ者、迹より、甘し、棄て、馬を、拍れて、用く、正城の、鉄口、橋を、渡ら、其、直馬、頭上を、投て、走ら、従ふ、兵皆、後れ、と、喘々を、續け、悠而、痛義、同、怒、不、棄、去、向、を、い、て、敵、前後、見、入、り、駿、馬、を、け、ま、り、猶、驚、か、り、心、地、七、只、管、走、ら、其、路、を、程、左、右、深、く、敏、敏、り、立、る、冬、樹、の、邊、を、過、る、時、思、ひ、に、左、右、の、隈、より、發、音、響、を、共、に、忽、焉、と、喊、聲、大、く、起、り、て、不、回、を、銃、响、箭、叫、敵、の、前、後、を、頭、れ、る、兩、隊、の、軍、兵、在、り、と、り、大、村、大、角、右、衛、門、尉、の、城、内、貞、住、士、卒、と、馳、て、突、然、

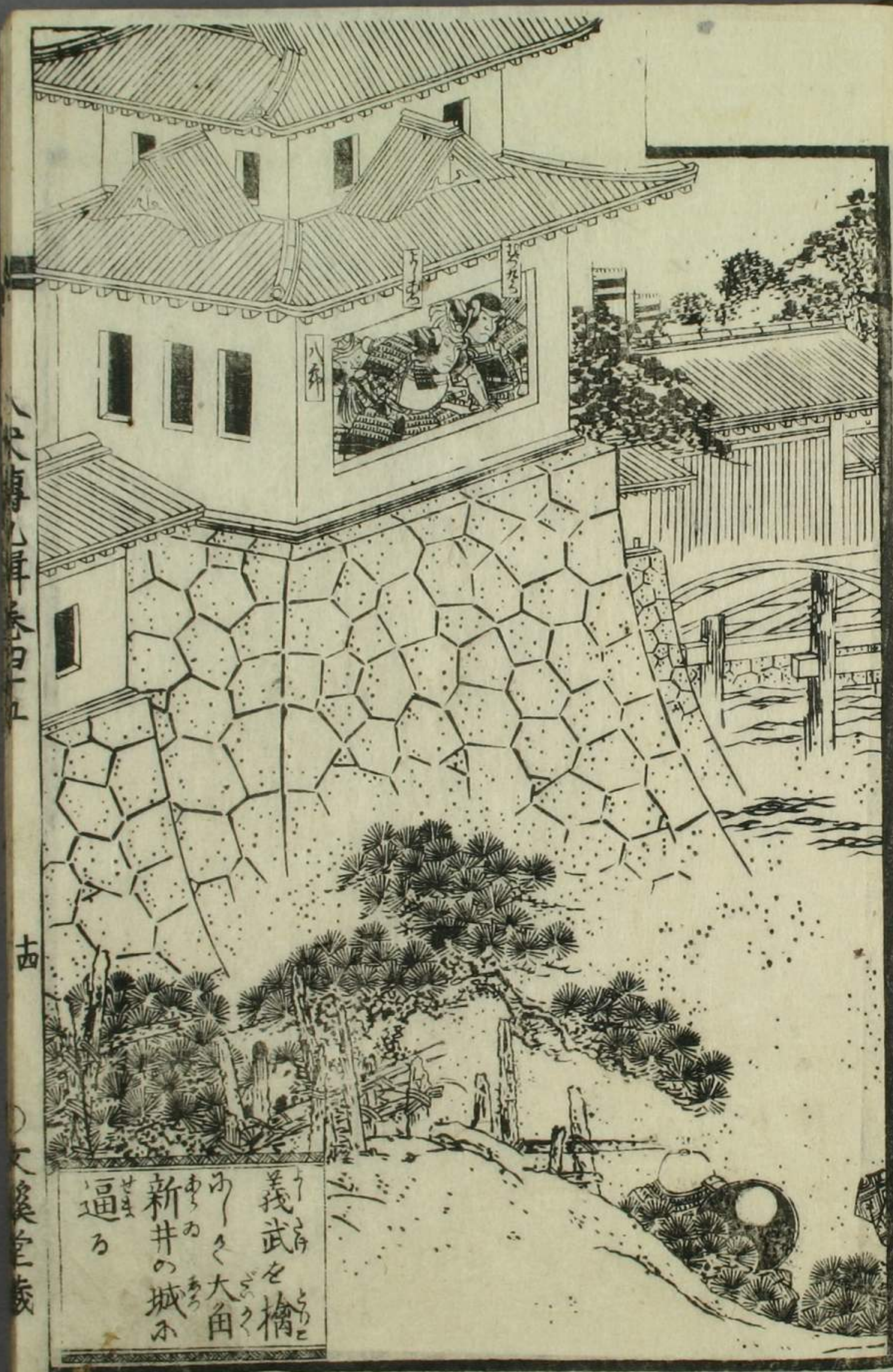
と、鋭、尖、に、鎗、尖、當、る、前、を、虎、豹、の、威、勢、驚、に、噪、く、敵、の、衆、兵、を、刺、し、又、數、を、破、り、四、下、不、响、く、聲、中、劇、く、思、ふ、を、三、浦、義、同、結、ぶ、鳥、穿、入、る、獸、不、異、る、を、尚、戰、す、欲、ま、る、を、命、惜、く、降、參、せ、と、大、村、大、角、の、不、在、り、茲、の、で、名、告、り、推、捕、を、八、面、勁、雄、聊、も、透、ある、と、る、に、義、同、の、辛、く、を、稍、一、方、を、殺、碎、し、馬、を、輩、て、逃、走、れ、況、や、士、卒、の、立、脚、も、或、の、敵、生、病、られ、或、の、命、を、免、れ、ん、と、降、參、を、勘、ら、れ、の、故、に、義、同、の、一、騎、辛、く、と、城、内、へ、逃、竄、り、猛、可、不、橋、を、除、せ、城、門、を、閉、ま、り、大、息、吐、て、居、り、ける。

第百七十六回 福福反覆して三士功と同名
追兵屢通り、忠臣主と極ふ

却説大村大角礼儀の既、士卒不謀り、戦ひ勝むるを、權且、路、不、士、卒、と、總、令、腰、戰、飯、を、披、ま、り、敵、の、馬、を、獲、り、一、糸、と、索、を、

餌せむとま登時大角の情地不貞住の談まるや我は三浦義同親子の
 阪東一の勇将たる所不敗績二度不及其智足ざる所以なれど其勢
 ひも脱くべからず我今義武を幸ひて城を渡りて他義同其子と思
 ふの故に城を渡りて他郷に去るべし自ら他の幸ひる他義の與ふ子と
 義武を幸ひて防戦別計策とて城を抜くべし先義武を幸せんとす
 貞住ある果々隨即兩個の雑兵を舊海邊へ走せし義武を守護の王
 卒の告ぐ那身を召しきりたる時大角の隊の兵も二度の降人を相加を約
 七八百名あり敵の乗棄する馬をえりて大角と貞住の騎馬を幸
 せし新井の城へ推寄る隊伍齊々整えたる徳而大村大角へ新井の城正門
 造りて馬を駐りて塹を隔て佐と城門を瞻仰れ其意とゆる一二の從兵聲
 高き不喚るや誰う在る當城の人々ものりり見の防御使犬士の一人犬

村大角礼儀来れり當城の主三浦殿の對面して説試んと思ふあり姑且矢
 丸を飛去るはの義を主へ傳達せしめんと喚門へ正門を守る頭人等うち
 先先陝牕より透し見て且驚き且慌る隨即草占八郎勇安頭九郎と
 喚做する兩個の小頭人をり義同の徳と報し義同一霎時沈吟して竟
 余と笑ひ額を拵る兩個の小頭等も叫くや開へ又幸ありたり我今城
 樓より登りて大角奴と向答え時鳥皆銃を隠し持て他が由断を敷るべし
 只一九老怨と復さるるも同近なる敵を射し後悔あらん若しの新参
 軍陣も俱せざれどもはる日武藝を試し先前火銃何れとる人小
 勝本本事われ俱に銃砲を推して我後方不從ひ願れてはる那奴を寛敷
 よくぞ行心づべしと示し合せて準備し城樓より登れ草占八郎勇
 安頭九郎も相從る後方不在る當下義同の城樓の窓を開けて左見右見

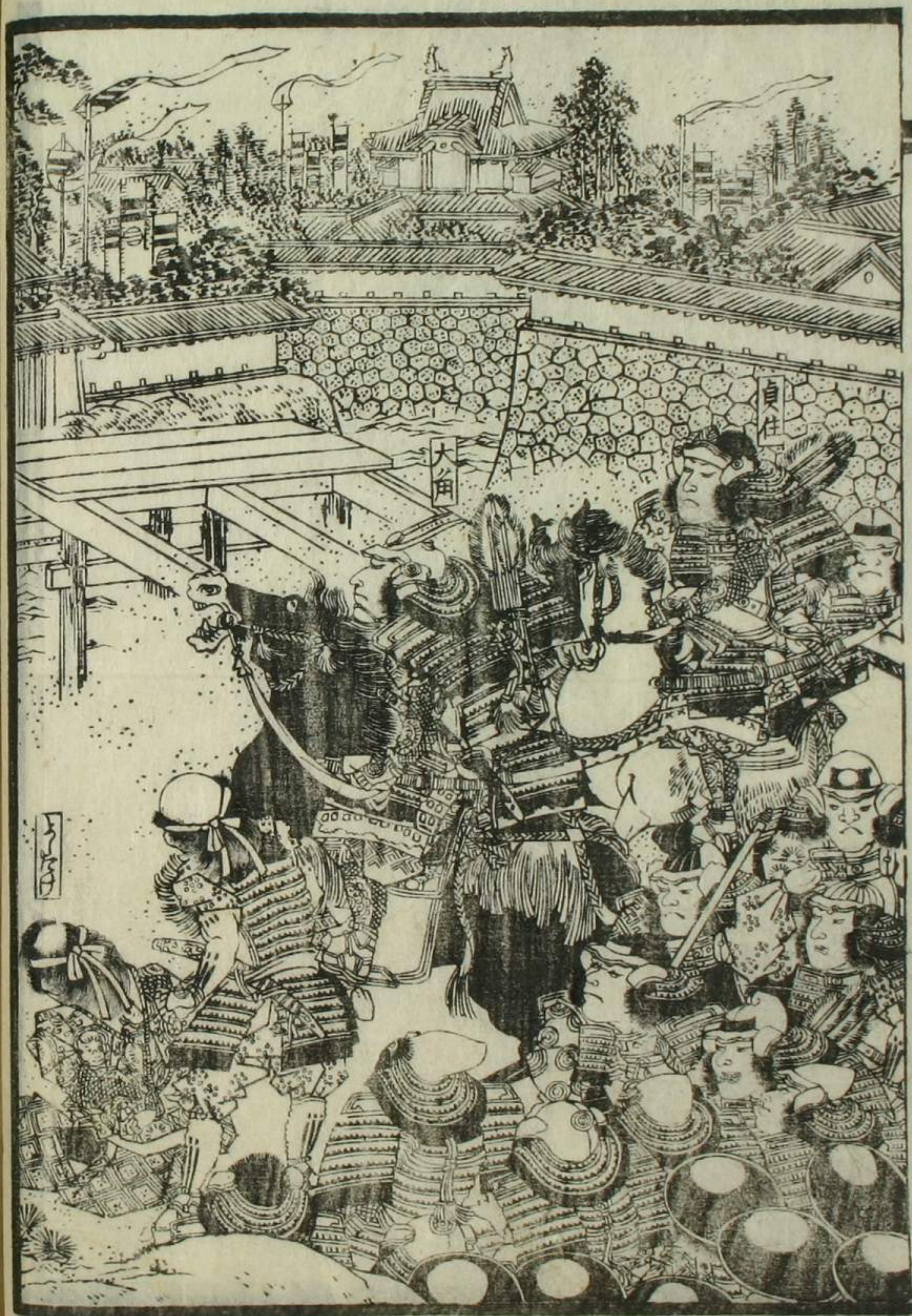


新井の城

古

大塚

義武を擒
 所々大角
 新井の城
 通る



大角

自任

大塚九軒卷四十五

大塚堂藏

先く囁るや。やれ艦見犬村大角。你誑詐の計を。船と借り我子城
 槍小あて。奸悪兇暴小尚飽也。勢小乗り城小迫りて。又何事といふや。
 と聲高申罵り向へ大角馬を斬際小找め。徐小答るや。奥州義同先
 とく怒を理め。我のよと。听久我礼儀軍師胤智の相計より。船と當城
 借るといふも。陷る死為る。但是寄敵の大兵を火攻して。扇谷定正主我
 懲さす。欲せし仙郎義武主。怒小我を赶鬼来て。竟小聞諍不及より。
 己とと必至。扇谷中。則小幸も。來れり。和殿速小先非を悔て。我と迎て
 罪と謝し。我も亦和睦して。義武を返す。憊ても惑ひ醒せし。拒て防
 箭を射んと。先義武の首を刎く。小唾して城と屠ら。甚麼を。と向返
 主を。義同の歩も果。怒れる苛聲震起。黙れ艦見。我と是兩
 管領の親族中。武勇との人小饒され。小愛小溺れ。子小顧。今ゆり里

見小従んや。とのひ。備小引付措た。鎧砲と情と合揚。只一發小大角を
 寛敷さんと欲す。小火索失く。ちとる。り。が。あ。の。ふ。と。心。慌。く。八。郎。頭。九
 疾敷も。と。の。ひ。後。方。と。見。る。処。を。勇。無。頭。九。郎。草。占。八。郎。乙。と。嘯。は。く
 背より。義同の左右の腕を。權る。ち。り。小。無。と。合。と。控。と。緘。伏。せ。登。り。鬼。り。て
 宛虎を。結。紐。る。像。く。緊。く。索。と。被。一。小。義。同。の。吐。嗟。と。ち。り。小。叫。ぶ。其。甲
 斐。あ。ら。索。小。か。ち。折。ら。救。ふ。近。習。の。死。を。悔。る。の。目。是。れ。て。眼。と。睜。り。在。り。
 送恨方。方。る。り。け。り。當。下。勇。無。頭。九。郎。草。占。八。郎。の。兩。聲。高。く。喚。る。や。犬
 村。主。諸。軍。兵。及。城。内。の。人。々。も。耳。と。傾。け。皆。よ。く。听。ね。當。城。主。三。浦。義。同
 と。安。房。の。潘。臣。田。稅。戶。賀。九。郎。逆。時。若。屋。八。郎。景。能。が。謀。り。て。既。小。生。拘
 たり。城。内。の。士。卒。皆。怒。小。主。と。救。ん。と。多。と。出。さ。先。義。同。を。結。果。と。且。若
 們。を。誅。戮。せ。我。隊。の。兵。們。城。門。を。開。て。大。村。主。と。招。待。せ。と。四。下。小。示。聲

と共義同を牽立り、又城樓を下り、刀を抜、義同の頭を楚と推
 當れ、正門の頭人、其隊の城兵の少く、驚き、怯れて、谷を走、ねと叫ぶ。
 敢近づ者、其間、逸時、景能の隊の兵十名有餘、門を閉、橋を架、渡
 きて、出、大角を迎、大角並、負住、其の訴り、事、便宜、毫も猶豫
 せず、馬を又、馳、俱、城を棄、入、れ、從、兵七、八百名、義武を牽立、咄と
 噓、を、綱、入、る勢、崩、る岳、異、る、城、内、在、り、と、ある、士卒、皆、齊、一、驚
 噪、を、但、蟻、雜、と、散、去、像、く、皆、後、門、より、逃、去、り、迹、を、殘、さ、ず、婦、幼、の
 號、哭、ふ、の、聲、を、り、と、響、き、大、角、先、老、兵、小、吟、唱、て、开、と、一、緒、集、合、せ、且、慰
 め、且、勸、り、せ、士、卒、の、乱、妨、を、戒、り、城、中、亟、に、靜、ま、る、由、徳、而、田、稅、逸、時、苦、屋
 景、能、の、生、口、三、浦、義、同、を、自、家、の、士、卒、に、渡、り、守、り、せ、且、大、角、若、小、案、内、を、
 是、城、の、正、廳、に、請、ま、れ、大、角、則、負、住、若、と、俱、馳、馬、より、下、立、り、設、の、席、を

就、一、の、從、老、兵、武、勇、の、每、俱、鎧、の、袖、を、連、ね、左、右、二、側、に、羅、列、れ、り、徳
 而、逸、時、景、能、又、改、め、大、角、と、負、住、若、小、對、面、せ、と、俱、其、席、を、入、り、
 大、角、の、面、士、の、功、を、賞、て、且、の、思、ひ、を、田、稅、甘、屋、和、殿、若、の、比、蟹、崎
 十一郎、と、共、侶、小、京、師、御、使、を、立、け、の、城、内、在、ん、と、神、を、ご、て、孰、く、知、る
 故、を、わ、め、甚、麼、を、や、と、問、へ、逸、時、先、答、て、然、入、日、暮、小、蟹、崎、生、と、共、侶、
 水、路、を、京、師、小、赴、く、程、小、其、船、遠、江、灘、と、過、る、時、凶、類、や、漏、れ、ん、仍、も、
 波、濤、小、揺、ら、れ、既、小、反、覆、ん、と、思、ふ、と、屢、を、誰、か、も、更、小、活、る、心、地、を、
 死、と、極、め、存、り、け、程、小、舵、工、若、相、占、ひ、て、蟹、崎、と、我、們、小、告、る、中、今、の、船、の、凶
 類、其、生、年、壬、癸、る、人、小、在、り、その、本、命、の、人、々、を、擇、除、く、又、小、離、船、小、
 載、り、流、し、棄、ぬ、ひ、る、自、餘、の、人、々、の、恙、も、あ、り、と、の、船、又、よ、く、走、る、の、を、
 備、立、れ、大、家、敬、馬、に、喜、愛、る、の、を、默、然、と、开、中、我、們、二、人、找、と、出、く、蟹、崎、生、小

向ひていふ。他人の知む我々の。壬癸の生年を。月も亦是不丁。其の他伴當
 夫役も必る。必る。この船遊山。水の為りて。傳の傳ある。俱
 天命と観念して。浮沈と河伯。不儘もせん。俱命を美り。京師へ赴
 く海上も。免れが死命と知り。身と犠牲。不儘も惜みて。其年る。人
 をも殺さ。不忠の至り。の上や。疾離船。うち下して。我々二人を。得載。今
 此ら隠れ。必死の覚期。不獲され。遂に其生年。壬癸。告る者。伴
 當五名あり。船工六名あり。我々と俱。十三名。送別を惜。下は離船
 うち乗れ。蜚崎生も。見術。不。只訣別の涙。沃。其天命。不儘。現船
 公の口。時。稱。當。我。每十三名。別。離船。乗。凶類立
 地。解。本船。風。西。走。見。然。亦我。乗。船
 離船。覆。回。潮水。揺。或。東。吹。或。西。推。流。され。

大洋の漂。一日一夜。の。景能。語。續。徳。而。其。次。の。日。船。人。さへ
 恙。流。寓。三。河。多。昔。子。崎。就。港。口。人。の。邦。助。因。て。旅。宿。を
 求。め。て。那。地。不。在。り。漂。流。の。事。の。顛。末。領。主。隣。尾。殿。不。安。え。隨。即。別。船。と
 して。安。房。へ。返。さ。べ。と。あり。漂。流。艱。苦。の。傷。れ。あ。わ。ん。逸。時。並。伴。當
 病。煩。ふ。者。多。り。り。れ。又。其。醫。療。日。を。費。して。十二。月。の。初。の。一。時。候。逸
 時。も。伴。當。も。病。着。稍。瘥。り。隣。尾。殿。を。告。示。して。船。を。借。り。て。還。り。ま
 く。欲。する。程。小。猛。可。小。里。巷。の。風。聲。も。扇。谷。山。内。の。両。管。領。諸。侯。と。連。ね。て
 水。陸。より。安。房。上。総。へ。推。寄。り。里。見。殿。を。攻。伐。す。其。言。孟。浪。を。され。が
 我。們。心。うち。驚。駭。れて。借。り。船。も。皆。うち。乗。つ。連。り。水。路。を。そ。の。の。幸。る。死
 上。の。又。幸。わ。り。相。摸。灘。を。過。る。時。暴。風。又。吹。出。り。船。を。や。る。べ。く。も。あ。る。が
 已。上。を。舟。を。下。を。新。井。の。浦。小。歇。り。當。城。の。番。卒。を。誅。り。船。を

必し捕籠て。野原へ來歴と鞠向き。登時咱等と逆時の情地示し合さる
 等。この地の城主三浦義同の兩管領の親族。他も亦我君の怨敵。然るを
 今明々地見の里見の家臣と名告ぐ。必那も殺さるべし。苗様々々。おれをよ
 と思ふ。あつと伴當等も。おれを立寄。却番卒ふうち向ひて。則頼
 陳等。我々の三河多。隣尾判官伊近の家臣。勇。並頭九郎。草台八
 郎。と喚做さ者。俱し。伴當。伊近。這回。兩管領家の里見を攻伐
 あり。と傳へ。加勢の軍兵を。あつと。思ふ。素より。城地。漏れ。あつと
 士卒。三つ。む。い。辨。稟。せ。よ。と。ある。君。命。ふ。り。我。們。則。使。ふ。立。五。十。子。の
 城。小。赴。く。水。路。中。暴。風。吹。勾。引。れ。る。浦。小。歌。の。い。と。実。一。か。の。告。ぐ。六
 番。卒。等。然。も。と。と。と。城。へ。お。も。た。て。事。急。々。と。懸。け。り。登。時。三。浦。義
 同。の。左。右。下。知。り。我。們。兩。個。を。文。注。所。る。局。の。内。へ。召。よ。せ。さ。る。立。寄。て。み。つ。ら

其来由と問ふ。いと始不殊る。ね。敢又疑を脱る。板齒を頭して。呵々と
 笑ひ。却り。隣尾が忠ある志。現賞を。若。們。主。僕。十。餘。名
 三。浦。義。同。の。知。れ。る。人。數。五。十。子。の。城。へ。參。る。も。然。せ。御。用。小。立。べ。く。も。あ。つ。と。我。折。を
 り。傳。達。せ。今。當。城。小。士。卒。三。つ。む。ね。權。且。の。留。措。ん。武。井。藝。本。事。あ。る
 る。が。前。後。の。門。を。守。る。べ。し。と。我。們。推。辞。小。由。る。開。け。辱。く。武。井。藝。人
 並。お。い。へ。も。何。れ。仰。付。さ。せ。又。仕。ひ。え。と。い。ふ。義。同。欽。び。て。次。の。日。又。我。們。兩。個。を
 馬。場。小。口。と。名。告。ぐ。弓。箭。銃。術。何。れ。と。く。武。井。藝。を。盡。さ。せ。試。け。る。就。も
 正。鵠。を。外。さ。ね。則。正。門。の。小。頭。人。中。我。兵。貌。扱。使。ひ。と。を。逸。時。受。續
 ぐ。今。程。我。們。の。折。を。覘。ひ。脱。れ。去。り。安。房。へ。還。ら。す。思。ふ。の。ま。で。便。宜。を
 ぬ。さ。り。然。ば。昨。夕。犬。村。主。和。君。が。赤。品。百。中。と。名。告。ぐ。當。城。小。來。ぬ。て。懸
 借。ぬ。り。時。夜。目。を。り。け。れ。ば。よ。く。も。見。ぬ。姓。名。も。亦。異。な。れ。心。も。つ。て。あ。り。け。る。當。晚

又義武がみづうら和君と追止んとて隊の者多く従へる。出てゆたしとも患ひと
 甘き猶外事も思ひいよ義武の境勇るも病後と云ひるが果敢なく和
 君を生拘られて今朝も牽りて這城の推しを來ぬ折不及び。那赤虫百
 中ハ即里見の犬士る犬村某甲とありけり。と越お肇て少知りて其然び
 堪ざれば先疾城門を推開て迎入れまと思ひくとも我腹心の隊の兵十
 一名も過さる不憚ら行心あるべと思難くありける程も義同火急の拙策成
 拓り半ら城樓不登りてみづうら和君と問答して由断を現ひ銃砲の撃
 落さんと計りけるその折の帮助もと。咱考二人を従へれば心よりて後方居
 正義同悄地不膝下不措た準備の銃砲の火索を夙く合意棄しと義同ハ
 知きて發ちまくる不火索を引ればうち撤馬は度と失ひく見くる腕を左右
 より振り推伏せ。結ねりて牽建ゆたと迭代の長談脩話の貞住並不

諸士老兵事の便宜恣まふ幸ありけるよと稱える就中大角の熟と听果て
 逸時と景能の奇功を譽て且いふ。今翔てゆく和殿考の暑不御使不立る
 ぐ。京師へ泊るむるふける風濤の艱と漂泊の苦と此を思ひ彼を懐へる
 崎の恙るや測知るべたるるねも今ゆく女々考思ふて益々和殿考風波の
 災る俱ハ京師へ参上る那御使の果まけれど今番の大事の遇され後ハ
 悔ハわつらん不這敵城不抑留せられて酒家と一功と同居考禍福と糾ふ
 纏不似るる伏姫神の真助多飲不測と云ふも餘りあり因て思ふ和殿考
 ぐあふ存の程詭詐の姓名も當意即妙と云ふべ其故甚麻とるる勇無頭
 九郎ハ田刀の美之勇ハ不従ハ田不従ハ力不従ハ頭の工るはと死ハ田力るは
 正とゆむ又草占ハ甘屋の苦や。あの美ハ誰も悟り易ら先義同と義武を
 あの処へ召よる我對面してふよりあり。とくといそせ六逸時景能ある果て

俱不次の間へ退りけり。然るにその時三浦義同義武の里見の士卒ふち守ら
 せし。次の間あり。一々逸時景能の實名実事を送る。洩せし。故に
 夢の覚る如くいと悔しく思ひけり。恁而逸時景能の義同義武を牽立
 せし。則正廳の公堂廊へ程と推居れば大角見々身を起して先義同
 と義武を受合ふ。そが儘の上坐を推登して被る索を解んとする。貞任
 逸時景能をちうち敬馬を拵止め。詞存一諫る。虎狼の猛も媚
 憐を求る者へ四足を括られ。故に況や義同義武の俱不足武勇不富。り
 奮力百人を合を死動敵る。不甚麼を被る索を解し。のみ。只是千慮の
 一失。欲慈悲も作善も敵小てそよらぬ。宜定不危は所行る。と。公を大角
 へ。不占と。掛を揚。角を辟。く。多力兇猛の敵と。公とも。仁義ふ。く。勝る。り。
 然るに我君至仁至義の軍令。不遵由りて。公の親子の索を解。公へ敵る。ら。ゆ。

城主の礼を失ハトと思ひ。然るに他等不仁。公は暴を以て我を害さ。各
 公を空く。して。他を殺さ。見て。公。已んや。然るに他等。悪名。永く。世。不。貽。え
 の。權。且。酒。家。不。任。せ。ぬ。と。論。ら。躰。義。同。と。義。武。の。索。を。解。棄。す。且。慰
 め。公。成。敗。の。天。時。運。の。然。る。所。誰。か。和。君。親。子。と。勇。り。と。せ。ぬ。あ
 る。ども。今。我。為。不。虜。公。せ。ら。れて。馬。前。の。奴。不。做。れる。者。へ。不。仁。を。以。て。仁。を。伐。り。兩
 管。領。の。惡。を。資。け。て。日。暮。と。る。ま。く。故。せ。し。故。抑。我。君。里。見。殿。へ。行。仁。義。不
 あ。ら。ざる。と。る。あ。の。く。我。們。も。其。仁。心。を。仰。せ。京。て。大。阪。大。山。と。共。侶。不
 今。番。水。隊。の。防。御。使。え。れ。ば。只。大。敵。を。防。ぐ。の。ミ。ヨ。ク。敵。を。殺。し。長。く。馳。て。城。を
 攻。め。地。を。畧。り。て。境。を。増。さ。と。饒。され。れ。然。し。け。れ。も。開。戦。の。常。情。也。時。氣
 と。勢。不。乘。る。と。死。の。敵。の。城。地。不。馬。を。敷。系。せ。ぬ。我。隊。の。兵。の。集。合。る。と。總。を。せ。ざ
 る。と。必。ず。信。れ。ば。其。間。和。君。御。父。子。と。水。路。より。敵。藩。稻。村。へ。送。る。べ。し。宅

春達をも船に乗る。共侶ふと思へども婦幼の故ら風濤の害怕あり。
 この故に御達はい皆當城に留まらせ。宜く扶持致し。その美へ心易ら
 てん且里見殿の仁君と和君御父子那地を造り多。敢て囚むるを見ること
 る。礼貌必厚く候べし。憊而東西和睦する。御父子共當城に返されん
 り。日と儂々俟つべし。その美も心易らんと。詞徐に説諭せ。義武空
 げ。嗟嘆して黙然とく。羞る色あり。姑且して義同と又たらるるを鮮く。
 腕と拍つ答る。つら。趣皆理あり。咱も親子の馬を馳弓と射刀と兼
 事と年来業とある。その。文学智術不淺けれ。心鈍くも謀られて且盗不
 糧と亦。仇ふ及と借まき。不禍竟不蕭牆の内より起ると悟ら。城陷
 して。親子楚囚なる。ぬ首と捕れ。幸らふ。不豈遙々と安房へい。や。
 願。ぬ情。ぬと。辭ふ。大角。慰め。又。逆時。景能。ある。ぬ。う。這

親子と別室に居て守せけり。憊而大角の士卒と水陸へ遣して。洲崎の
 水戦の勝敗と山内顯定の鎌倉の光景と撈ら。洲崎の閉
 戦の寄隊衆艦を皆火攻せられ。自家十二分の勝軍を死と云。又鎌倉
 る。顯定の館。老黨齋藤左兵衛高実が。水戦の大敗と新井の城。大
 村殿の攻落され。と。知り。驚。馬。怖。る。と。大。なる。船。主。君。の。宅。眷。ふ
 俱。して。館。と。毒。跡。と。埋。めて。往。方。も。あ。る。む。る。り。く。況。や。山。内。の。家。臣。等。
 誰。う。一。個。も。留。る。家。火。を。船。に。運。載。す。宅。眷。と。お。ろ。水。路。より。落。亡。し。り。と。
 少。え。け。り。有。徳。一。程。の。三。浦。四。十。八。郷。の。御。士。豪。民。村。長。莊。客。等。の。年。來。
 里。見。の。仁。政。を。慕。あ。く。思。ひ。く。各。々。戎。衣。し。新。井。の。城。に。詰。束。は。俱。ふ
 大。角。の。隊。に。属。す。當。城。を。守。ら。んと。願。ふ。者。千。と。り。て。數。ふ。べ。し。又。只。是。の。美。あ。ら
 ぶ。御。小。城。と。毒。葉。で。逃。亡。す。新。井。の。城。の。士。卒。們。と。甲。良。龜。九。良。さ。う。り。あ。く。

投ぐ漕去る程不従ふ兵多う。其の時同船多く左右侍る者大石
 源左衛門尉憲儀白峯麻生八廣原箕田源二兵衛后細信城左衛
 達頼只是のこの餘の士卒二百餘名初五萬五千有りける大兵比
 什一も足らねども順風よければ漕脱く約三時許の程不逃水又武
 藏の河崎の浦小船果しく乗乗る陸小登るありより五十子の城へ
 里小過れぬ水路と来ぬれ馬の然りも總大将の御帰城小御歩仍
 馬幾足り敷糸がくありと憲儀見入り熟視て兵每那他を見上那馬
 多く那里小在り捉て館を乗せまゝ我々うち乗る五十子へ御伴せん
 牽のくまを吟吟れは士卒們唯々と心も果ぎ走りぬる聲昔めくをれ
 馬主毎の馬守の御用と牽のくまを喚りて鮮見を解る五六疋

奪奪んとてければ牛馬經紀等驚馬の慌る。ある理不盡おの金や。縦
 守の御用とも。ある皆人小賣りる馬を并と價も賜らで召さうと云い
 とのいせも果に又聲劇き。這奴等大胆不敬と非如千金の馬中せよ。
 館の急召さるる献らる目小物見せん。覚期とせよと罵りて握固め
 巻の電光右もも左もも。毆た仆し又踊躍り。其好馬を五六疋追
 立々牽めて来ぬれ憲儀の含笑て鹿悪るれども鞍鏡孰も一具あれ
 尤好平々とひつちも先一疋を牽上をさる。馳て定正うち乗らせて却憲
 儀廣原達頼后綱のうち乗る。俱して河崎河原小造りて前岸へ渡さ
 ち欲まる小船公考の今の強虐と遙小見の害怕やあけん。船と風くも
 漕退けく。前百の水際小維だる在り。雖喚々漕めてとるねら。定正連
 平焦燥く。さく喚べとらるる憲儀のく怒る堪は士卒平知て。

船公等と遠箭不被射殺ねと敦園暴く罵ると后綱急不林也
 我館の御威徳あるも聞戦敗れよの為体中。御帰城といとせよ
 田夫野人の侮りも。御下知不従ひまらぬを奴心各の鄙語ふを見不棒
 敵の似るべ。敵の足らぬ者と知り。這里中時を程。あつ遠く追来
 身敵のやあらん然。這河上る。矢口も造り各ひ。津を求めぬとも然
 有りとをり。答ていも。決め定正是とうち。后綱の意見誠然
 然。矢口不造らんと。そが僕馬を歩まれ。廣原憲儀ら左右不従ひ
 又達頼の先不立ち。后綱の殿して。従ふ殘兵恍惚るも馬を逐ひつた
 けり。介程不剛才定正の士卒も。慘く敷。介される。牛馬經紀五六名あり
 俱不沙不塗れ頭髪を乱して。身と起。罵れが。大家の伯樂里の杜伎

數十名走り集りて情由と生聞き。俱不送恨不堪され。慰めせむ向
 火を附るの。樹も開が中。馬淵場九郎長連と喚做。老御者あり。牛
 馬經紀の乾父中。毎不氣と使。事と好。俠氣とて。自負む。破落戸
 有。これ。那理不盡。扇谷の士卒と憎む。大々。先。被。乾見。叱
 窮。且。縦。管。領。殿。の。威。勢。と。て。せ。る。も。經。紀。見。の。賣。買。東。西。を。奪。奪。を
 誰。う。美。服。せ。ん。是。昔。の。皇。宗。の。今日。の。と。る。と。上。が。上。る。れ。下。ま。で。の。買。係。り。不。錢。を。遠
 さ。を。民。を。虐。け。身。を。肥。たる。報。ひ。の。今日。の。敗。軍。僅。不。二。百。飲。三。百。の。殘。兵。を。従
 々。活。路。索。て。渡。せ。られ。と。云。那。為。体。を。見。さ。少。志。鏝。百。も。の。損。る。六。厄
 落。一。と。思。ふ。く。已。も。せ。の。圓。金。の。耳。と。揃。ね。が。賣。買。る。ぬ。活。馬。と。我。頭。を。奪。奪。を。れ。
 和。郎。等。明。日。も。何。ぞ。の。宅。着。不。麻。米。々。と。喫。ま。を。疾。趕。蒐。て。合。復。さ。を。邊。魯
 從。事。不。る。の。と。腰。脱。每。奴。と。罵。獎。せ。是。を。勇。む。牛。馬。經。紀。里。の。杜。伎。破

了の事と好むも好むも執力負む似而非武者汰竹槍造作腰刀赤檀の
 棒借水竿或纏額繩禱各みそ身を固る場九郎を首や。今も残され馬
 牽よそうち跨る者五六名大家競ふ開か程不武勇と好む破落戸。這里那
 里より走加りく二百餘名あり。他と對立を。疾軒菟よと脚を
 乱して咄と嘘畫て軒より。有徳折々這津又一夥の落人も是則別人を
 言義不妙見嶋の柵敗れ大田小文吾不擒せられ。彦別夜又吾數世他大田が
 慈善を其隊の兵一百五六十名と共侶不虛舟不載られ流し放され。其
 船大洋不流れ漂々或西或東して西三日と麻呂程。今日も辰巳の追
 風とゆる。その河崎の浦不漂着あり。定正の隊の戦艦洲崎の澳や。敵火
 攻せられ。其一艦船頭の焦く棄れる人の一個もあら。脱棄る甲冑と器械の
 多き。燔殺りる水熾さるも見る。扇名家の戦艦るを知れ不足り。

原来自今日那澳不閉戦あり。館定正の負さむぬの快と思ふ。白月の安ら
 ね。先士卒西三名と陸不登せ。這頭の風聲と撈らる。姑且して其兵
 号の慌しくかゝる。箇様々と告ると所く不定正の残兵僅小二百餘名を
 おく。方僅まの地へ脱れ来る馬市る馬幾足快豪奪させく。ち乗て矢
 只のくへ赴た。又牛馬經紀們が開と怨と破落戸を三四百名取合て
 軒く。我妙見嶋を。大田奴不擒せられ。大刀戎衣も身不添。汝達と
 共侶不這船不乗せられて放流され。より。稍の浦不寓ける。幸而して
 自家の焦船同浦邊不流れ来て器械あり。戎衣あり。各と俱不是を
 穿て。その弓と彎ら。館不寇。なる。人々を追敷て。血不
 做まる。先途の恥と雪る。不足る。本領安堵疑ひる。とくせよ。

せび大家俱不威勢漏る。急れ御伴仕らんと答て多く焦艦を係。鎧戎
 合て投被る。締る表帶上挿の笠前を駈ひらんと合も有り或は鎗と校む
 準備を多く救正へ然る所の先不立つ。數世小従ふ其隊の殘兵河原池
 ひ不矢口と投て飛が似く不追蒐けり。余程不。扇谷定正の箕田后綱が意
 見不因く。憲儀廣原達頼等と殘兵三百許をおく。矢口を投ていそ
 程不忽馬ととて。趕來る敵あり其兵約莫二四百名。皆没我衣中。騎
 馬五六人あり。多く不器械と引提て馬盜見と逃さると異口同音不喚りて。暮
 地不近つと。后綱佐と見うると。原來那牛馬經紀們が馬と召れと怨ま
 上と怕ぬを法の狼藉天罰思ひ知せんぞと罵るがう。乘る馬の鑣
 了と旋らして未ぬると。暈と俟り程もる。現戰世の習俗あり。市人
 も皆武を好み。場九郎們の物をもせむ。蒐れくと器械を振込めて

攻戰ふるの時后綱小従ふ。敵と柱る士卒一百餘名尚寡はあねも
 嚮向水戦の火攻せられて辛く命を免れし。纏戰飯もあるとるけれ
 饑て閉戰如意なる。兵倍る島合の小敵不殺頼されて立脚もる。后綱
 危く見え。定正も亦已と。のを憲儀廣原達頼等と。從殘兵三百と
 找め。后綱と援んと馬を返してうち向ふ。浩処一隊の軍兵敵れ
 背不出来るあり。其兵僅小百五六十名皆歩行立る。中隊の頭
 人とか。刃に猛者鎗校て。聲高き。やれ。艦。見。毎。せ。を。管
 領家の四家老第一大石見守憲重の隊長。然る兵ありと知られる
 下總妙見嶋の柵の頭人。る。彦。別。夜。又。吾。數。世。不。在。頭。を。並
 ぐ。刃。と。受。上。と。名。告。喚。り。威。勢。猛。く。隊。兵。を。蒐。て。攻。破。其。箕。田。后。綱
 この隊の兵も思ひかへ。援兵不誰り。然る勇さ。水母の骨。あ。心。地。して

怯む逆徒を前後より息も養を攻め馬淵の徒前後の敵中り
 かそ多く敷き開が中頭領馬淵場九郎の箕田后綱と鎧を交へて一
 上二下と挑戦ふ修煉拙余わねども其器械竹槍を竟り尖頭を打
 折られ怯むと后綱やと聲をて胸前馬箠と刺さるる地上下控
 と隣ら馬の離れて横路のくへ走れば人も逃迷ひて敷き者も三つりけ
 然ハ敷世が援ふより然ハ剛ハ馬勢の逆徒の或ハ敷れ或ハ又往方の
 知れ逃亡く路の障子の開けかぞ大家勢を中定正ハ今料は彦
 別夜又吾が忠戦をいと訝しく思ひくハ則大石憲儀をのり騎馬の追還
 召上るるみづくる来意を多きまふ彦別敷世ハおそく憲儀ハ向ひて稟
 を申す臣等ハの夜見の防禦使大田小文吾悌順ハ妙見嶋の柵を攻破
 られて憶志敗軍ハ及びく只得残兵百五六十名と徒て船ハ乗りて虎口

脱れて再戦せまき思ふも似ぞ其船海へ推流され一日二日と漂ひ今日ある
 河崎の浦の船の寄り一時那地の逆徒多く聚會館と追鬼多しんを既ハ打
 出ぬと風聲耳を多くゆきくちり敷馬は脚迹を暮ふてあふ果して
 中途ハ御難義あり因て一臂の力と勤めて御伴の衆と共に賊徒と妻はひひ
 へと実事有談らまき今ハの僥幸の功と負て説話の詞の果果なる
 折る又ハの河原の横路も軒鬼來り勁敵あり是則別人るハ大山道節忠
 與ハ剛才の地の開戦ハ主と喪ひて走り來り馬を捕駐てうち乗る者甲乙俱ハ
 三騎も左ハ荒川太郎清英ハ右ハ印東小六明相ハ隊の兵一千五百
 名一隊ハ做して前後ハ乱ハ魚鱗鶴翼ハ相備て群ハ虎の谷と下りて羊と
 遂ハ威勢振然四下ハ响く武者聲火鋭ハ定正背を見せを往る正月
 高嶺を休ハ頭甲を射て落して舊君の鯉言を復さめくハ首級を捕む

去。盡さふ足らぬ飽りとせきり。煉馬の舊臣武藏の豪傑今も里見の防禦
 使。大山道節金碗忠與るを。返せと喚れ。敬馬は怖る。定正は中
 憲儀。廣原連頼。后綱。數世も俱く吐嗟とる。胸を洗せ。再度の勁敵免る。之
 もあられ。殘兵四百五六十名と。找め。路を斷塞。敵を河原へ。一霎時の防
 死戦へ。印東明相。荒川清英。真先。馬を馳入れて。鎧の敵を刺付。武勇不倣
 ぶ。其隊の雄兵。吐と嘯て。七千一。駈敗り。又數を亂其。然も。餓る士卒。們は
 勁敵を殺顔。され。或の瘡を負ひ。命を預。殘るの風。逃亡て。隊斑。おろ。一。數
 世の印東。小六。擊れ。又白峯。廣原。と。信城。連頼。の。道。郎。清英。不。敷。れ。け。り。并。中。獨
 箕田。后。綱。の。數。々。所。の。痛。癩。を。負。る。只。定。正。と。一。步。も。遠。く。落。え。と。應。り。近。習。の
 杜。依。兩。三。名。と。俱。踏。止。り。血。戰。て。竟。一。騎。も。免。る。者。も。亂。軍。の。中。小。皆。戰。死
 あり。人。小。臣。る。義。と。失。足。敵。も。あ。の。人。あり。と。道。郎。即。是。を。答。言。け。り。然。い。と。定

正。漏。走。た。あ。れ。其。春。初。の。路。の。高。谷。を。數。む。て。明。相。清。英。と。俱。馬。を。總。へ。も
 あり。鞭。を。鳴。り。隊。兵。を。駈。て。那。里。ま。も。と。趕。あ。す。け。る。介。程。不。肩。谷。定。正。大。石。憲
 儀。と。俱。主。從。二。騎。僅。く。從。近。習。之。名。と。左。右。不。立。せ。津。と。常。を。東。弓。矢。口。と
 あり。投。て。由。程。不。趕。蒐。未。ぬ。荒。川。清。英。印。東。明。相。二。騎。の。頭。人。隊。兵。を。找。て。是。馬
 と。人。馬。の。脚。响。近。て。免。る。も。あ。れ。定。正。相。從。三。個。の。近。習。目。已。と。引。引
 返。相。逆。て。防。死。戰。を。執。と。見。る。程。不。怯。れ。り。然。あ。る。也。這。頭。不。隈。あ。竹。數。ふ
 あり。潛。り。入。り。逃。亡。け。り。明。相。清。英。是。を。見。て。定。正。今。の。没。脚。解。是。多。捕。お。せ。と。馬。を。並。へ。て
 あり。連。兼。那。時。遲。這。時。速。那。取。水。竹。の。數。屏。と。内。より。托。地。と。推。倒。し。て。頭。を。援
 あり。助。の。隊。長。後。と。續。く。雄。兵。四。五。百。又。數。く。隊。を。建。固。め。鏡。砲。障。を。發。出。て。銃。响
 あり。烈。し。かり。けれ。明。相。清。英。士。卒。と。制。せ。敢。四。小。戰。を。當。下。件。の。隊。長。今。竹。數。ふ
 あり。逃。入。り。定。正。の。近。習。之。名。と。逃。し。由。遣。る。數。を。捕。り。人。鎧。の。尖。頭。不。串。に。其。首



えさたけり
河崎河原
道節大
助友と戦ふ

道節



道節

八景山集

七九

八景山集

級を振棄て敵に向ひて喚ぶや追隊の壯健も憚りなきを我父道灌の密
 意不困之隊の兵を以て這地方より我君と俟ゆる巨田新六郎助友と名止る
 果ぬを折道節馬を走らせ多原來助友と名れ那奴は荒茅山の宿懸あり
 先那奴より轂を捕去。竟不定正を漏しやせん印東荒川躊躇ふところ兵毎
 蒐れと焦燥は明相清英血氣の衆兵美りぬ。心も果ぞ入乱れてを戦ひけり
 正は是老龍虎魁雌雄と争ふ豈九庸の闘戦るんや。一場の大殺闘ふべ
 然る足曳の山も是か為鳴動して群獸走り勇魚取る海も是か為不風深
 じて鮮介も沈まむ。この段の尚長やうやく。五巻中てのをも足らむ腹稿あまうあ
 るゆり。又之巻を増て局を結ん江湖上の諸看管。這而雄の勝負を知ら
 欲くは又巻を更め。且下の回解分ると聴ぬか。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十五終

○八犬傳第九輯下帙下編之中書画刊刻工匠目次

出像畫工

柳川重信



淨書筆工

谷金川

卷之四十一

高谷熊五郎

卷之四十二

全

剖劔

卷之四十二

澤金次郎

卷之四十四

全

卷之四十五

高谷熊五郎

○第百七十六回以下第百八十勝回回外剩筆
首卷全部總目錄八犬士畧傳姓名目次共四卷近日出來

著作堂一夕話 隨筆 三卷 近刻 大本

菅聖廟御傳記 曲亭主人舊作 五卷 近刻 北尾紅翠齋画

南總里見八犬傳 共百零一冊 並製本 御詠馬皮紙 榻箱入共出来

本傳一百八十勝回結局刺筆を
二百冊にて全部成りし本般八巻
のへとも先彫刻成る所の五巻と
發販致しる餘三巻も推續に
出版瀕邊有るまづくは是より
年々毎集抄出し以る由來以後
其版を不度しき事
板元文溪堂敬白

○家傳神女湯 一包代百銅 妙人のみちのたふしを
用ひてその功中りてその功
用ひてその功中りてその功
○精製奇應丸 其種をえりてその功中りてその功
用ひてその功中りてその功
○熊胆黒九子 一包代五下 その汁をりてその功中りてその功
用ひてその功中りてその功
○婦人つゆの妙薬 一包代五下 その汁をりてその功中りてその功
用ひてその功中りてその功
製茶本家 四ッ谷あるの町 瀧澤氏
弘所 江戸元版町中坂下南側中程たは沢氏

○内茶おろし仙女香 一包四十八文 ○黒油美玄香 同
○金匱救命丸 江戸林氏製 大徳寺町三丁目丁子屋平兵衛
元版町中坂下南側中程たは沢氏
天保十二年辛丑春正月吉日發行

發販 書行

京都 河内屋藤四郎
同 大文字屋仙藏
大阪 河内屋太助
同 河内屋直助
同 河内屋茂兵衛
江戸大傳馬町三丁目
丁子屋平兵衛板

